



必然的に数釣りの勝負となり、目標を100匹として、何時もそれ前後のアジが釣れたものだ。アジの他にはサヨリ、チシャゴ(イシダイの幼魚)時には大きなボラなんかも掛かり、あちこちで大きな歓声や悔しい叫び声が響いていた。

さかな釣り

夏になると夕方からアジを釣りに漁港までよく行ったものです。小学生の私にはエサになるアミが自分の小遣い銭だけでは買えず、友達と釣り具店で待ち合わせして2枚の百円玉を一つのアミエビに変えて自転車を釣り場へと走らせた。

夕方五時にもなればそれなり子どもたちと少しの大人たちが防波堤に並んで竿を出して、街灯の下は何時も誰かがすでに釣りをしていた。日没前にもなれば釣り場は人と人でごった返っていて、釣る事だけではなく隣の人の事にも注意してトラブルがないように時合いを迎えるのもアジ釣りの特徴でもあった。

サビキ釣りで狙うために



あの頃は普通に子どもたちだけで日没まで釣りをし、当たり前のように夜道に一人で歩いて、今思えばとても危険な事のようにも思えるが、その中で何かを学んだ事はとても大きかった。その反面もしもの危険性も多くなると思う。

私は今、親になり子どもたち何に何を教えるのだろうか。当時の僕たちは、バケツに大漁のアジを入れ自転車を積み込み、楽しみにしているテレビ漫画を見るため、友達に「じゃあね」と家路を急いだもの。つづく

aburayamayu

＊釣りは、防波堤や磯ももちろん船からでも、ゴミをその場に置いてきたり、ポイ捨てをしないように心がけ、ライフジャケットを着用するなど、安全にも配慮して大いに楽しんで

7月 兼題 「港」

藤本健人 選

片肌港まつりの撥さばき 虚空港しおから蜻蛉の滑走路 鳥都の風も降りてくる 港 烏ラップを下りる昔の名で呼ばれ 海鳴りの機嫌を聴いて港 出征前港に立った古写真 島船の波を揺らし去る 余所者を照らす港の灯が温い 出港の汽笛別れの時を上げ 漁火に両手あわせる妻の影 妻の待つ港へ逸る大漁旗 漁船待つ港に妻の薄化粧 この港からも幾たり海ゆかば

ふみこ 仙京 網幸 仲幸 華子 ひろこ 春菜 扶巳 篤世 海秀 星舟 海秀 ゆたか ゆたか

7月 兼題 「先生」

川上甫卸 選

先生の疲れをほぐすスイトピー 愛弟子も仕事の不出来叱りつけ 憧れの先生今も胸にあり 家中で家庭教師の役を持つ 師の声を聞きたく海に来てしま

知絵 仙京 幸子 幸子 緋呂子 緋呂子 緋呂子

《詩》

井手 三穂子 サルスベリ

サルスベリ サルスベリ サルスベリ サルスベリ 枝先に群がり咲く ピンクやホワイトの花 六枚の花びらがちぢれて はなやかに見える

あなたの世界に... 『雄弁』 サルスベリの花言葉は 愛でていると 心がなごむ

《投句》

東京 馬場喜代治

願ひただ一つになれり星今宵 風にはか一片ほどく蓮の花 雨後の朝ふと庭隅に茗荷の子

先生と呼ばば四五人振り返り 先生と呼ばれ今だに修行中 校長と呼ばれ心刻み筆を持つ 師をなぞり師を追い越せと筆はこぶ 先生は三歩さがっていい見えず 亡き師への思慕つらさる「海の声」 海山が先生だった幼き日 「酒を控えよ」酒豪の医師の処方箋 先生の信じてはむらランドセル 九十の師は教え子に教えられ 師の生きし道美しく夕焼ける 夾竹桃白く輝く師の忌日 師を越えた者皆師が手焼いた奴 父帰りの医師を待って島の民 人の背を先生にしてまた遠い 秘伝などない丁寧師の教え 先生と呼ばる師の無き風の街 軸吟 先生はさじ加減まで教えない

健人 春菜 華子 藤本 海秀 篤世 星舟 網幸 仲幸 扶巳 篤世 海秀 星舟 海秀 ゆたか ゆたか

《短歌とエッセイ》 市山 節子

城崎 (兵庫県・山陰)

《短歌とエッセイ》 市山 節子 城崎 (兵庫県・山陰) トネルのあわいに光る日本海わが絵ごころを 駆き立てて過ぐ この街のいで湯見つけしコウノトリ駅に佇む銅像となりて 彼方より呼びかけるごとく川沿いに直哉ゆかりの桑の木が立つ 歌碑めぐる散歩コースに投稿のポストもありて 紙片差し込む 無気力のおのれに喝を入れたくて道智上人の独 鉛水(どっこすい)のむ かがを持ち浴衣にこま下駄ひびかせて外湯めぐりに心を放つ 湯の宿に夜(よ)の川ながめて文人の気分ひたる今日のひと日を

ゆかたの似合うまち

以前から心惹かれていた城崎(きのさき)駅に降り立つと駅前美しい湯飲み場のそばに、この街の温泉を発見したというコウノトリの銅像が私を迎えてくれました。 この街の魅力は川沿いの柳並木に太鼓橋、白い壁の倉、木造三階建ての格子戸の建物が並ぶ昔のま、の風情のあるたたずまいです。この情景に溶け込む様に観光客が駒下駄に浴衣を着て外湯めぐりをする姿が、両岸の柳の樹をバックに良く調和して映画を観ている感じでした。どこを切り取っても絵になる風景で、夕暮れまで眺めました。 城崎温泉は志賀直哉をはじめ多くの作家、歌人、俳人が訪れた所だけに二十の歌碑が文学散歩道に建てられており、城崎ならではの情感漂う文学の雰囲気を味わう事ができました。



投稿

悲しい一片の書

篠崎 義孝

運命をきめた赤紙(召集令状)が来たのは、昭和十九年九月二十九日の夕刻でした。十月一日に大村四十六連隊入隊通知でした。 戦没した兄は勝本町の霞翠国民学校(小学校)に教員として勤務中でしたが、教えていた三年一組の児童と別れを告げました。 郷ノ浦港まで四里の道を、父母と見送りのため、汗だくで到着、百人近くの乗客の中に交じり、歓呼の声に送られ乍ら乗船。「睦丸」はテープで埠頭は埋めつくされていました。 兄とは、入隊する方々を

代表して出発の挨拶をしたのが、最後の別れとなったのです。入隊後は直ちに満国境の警備につくため、牡丹江で二月月程駐屯、その間に、軍事郵便で一通のはがきが弟の私に届き、次のことが書かれていました。 「海軍兵学校をめざして国家、同胞のため後に続きなさい」と激励の言葉でした。間もなく終戦、兄の遺言も空しく、目的を達することはできませんでした。 復員軍人、軍属の引き揚げが始まり、父母と家族の、兄がいつ帰るか、待ちわびた姿が思い出されます。昭和二十一年二月十九日付で戦死の公報がつかまりました。父母は悲しみのどん底につき落とされたのでした。何と無惨なことでしょうか。その当時の父母の姿、兄を思い出すたびに、戦争のおろかさ、命、平和の尊さについて考えずにはいられません。十五日に第六十七回終戦記念日を迎え、新たに不戦と平和を故人に誓いながらパンをとりながら生きていきたいと思います。



8月5日に見られた二重の虹。左京鼻で。yujibaba